

# 名古屋市立大学における学生・教職員のジェンダーバランス

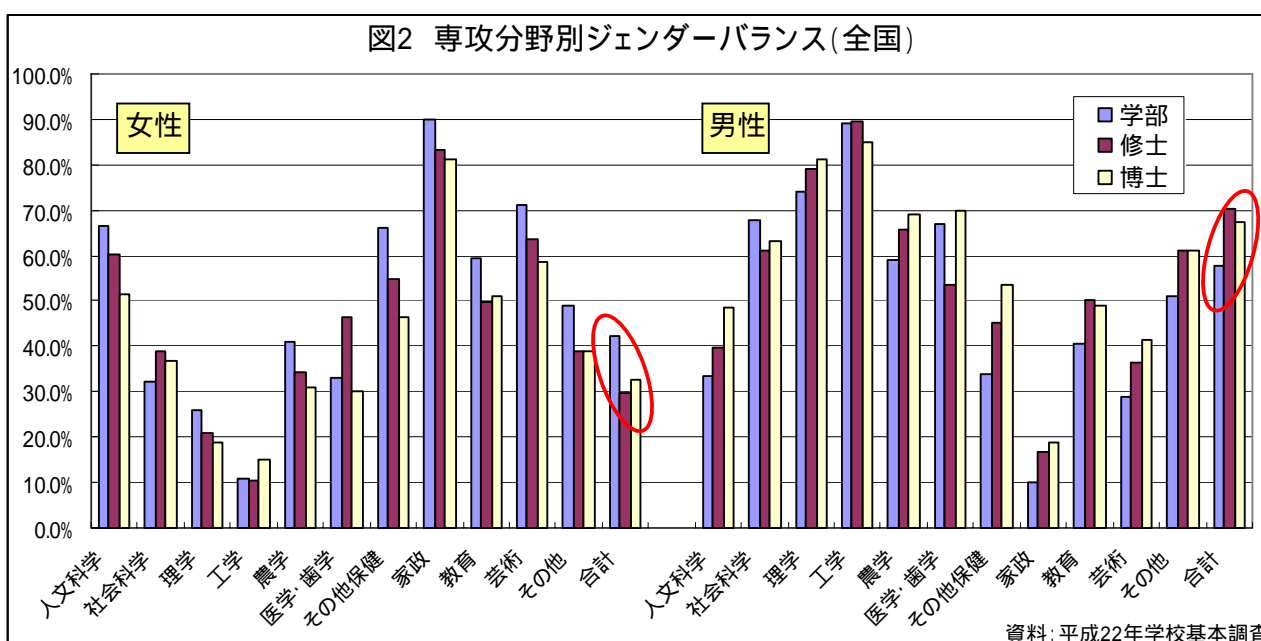
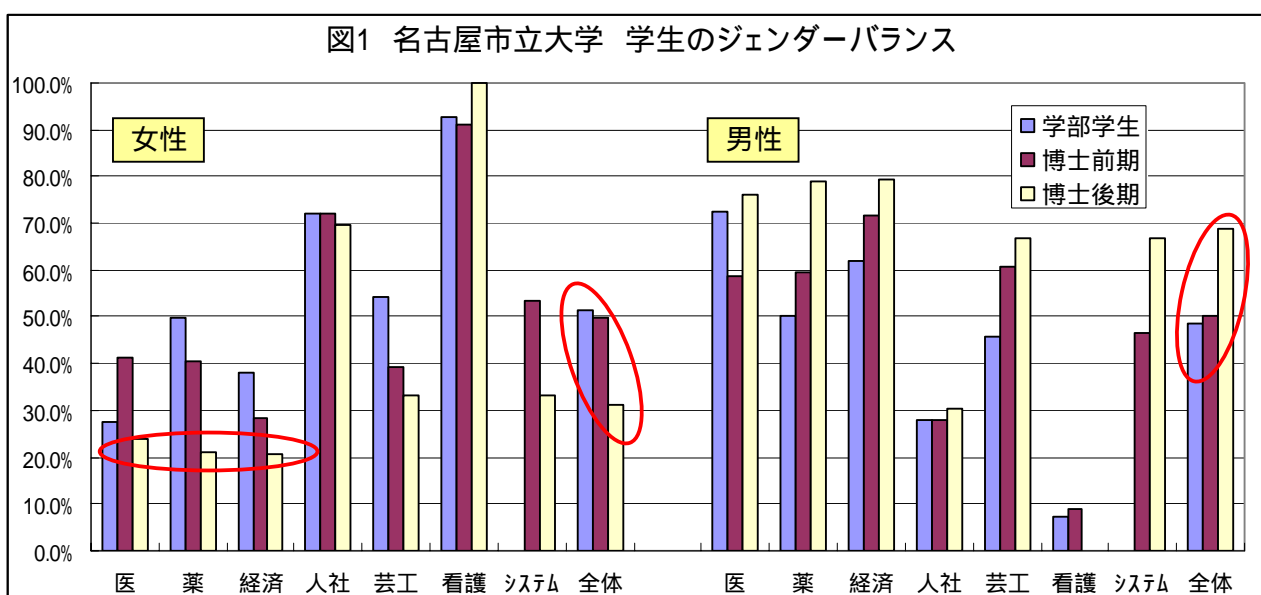
データ:(学生)平成22年5月1日現在 (教職員)平成22年8月1日現在(図3のみ5月1日現在)

## 1 学生のジェンダーバランス

名古屋市立大学における学生の男女比を見ると、学部学生では女性51.5%(1735人)、男性48.5%(1637人)、博士前期課程では女性50.1%(220人)、男性49.9%(219人)、博士後期課程では女性31.1%(96人)、男性68.9%(213人)となっており、比較的女子学生の割合が高くなっています。

しかし学部・研究科別に見てみると、性別によって専攻分野の偏りがあることに気づきます(図1)。看護学部・看護学研究科や人文社会学部・人間文化研究科では女子学生の割合が高くなっていますが、医学研究科や薬学研究科、経済学研究科の博士後期課程では男性が多く、女性の割合は2割程度にとどまっています。また多くの学部・研究科では、学部や博士前期課程から博士後期課程に上がるにつれて女性の比率が低くなっています。

このように分野によって学生の性別に偏りがあること、学部から大学院に上がるにつれ女子学生の比率が低くなることは、日本の他の大学でも同様の傾向が見られます(図2)。



## 2 教員のジェンダーバランス

名古屋市立大学における教員の男女比を見ると、女性 19.4% (96 人)、男性 80.6% (400 人) となっています。

学部・研究科ごとに見ると、看護学部では女性教員の比率が 77.8% と非常に高くなっていますが、その他の研究科では低く、特にシステム自然科学研究科や薬学研究科では女性教員の割合が 10% 以下となっています (図 3)。近年女性教員の比率はどの学部・研究科においても上昇しているものの、女子学生の割合に比べいまだ低い値にとどまっているのが現状です。

また多くの研究科では、職階が上がるにつれ、女性教員の比率が低くなっていることもわかります (図 4)。このように職階が上がるにつれ女性教員比率が低くなっていくことも、他の大学と同様の傾向です (図 5)。

( 名市大における各学部・研究科の学科別・分野別データについては 7 ページ以降をご覧ください )

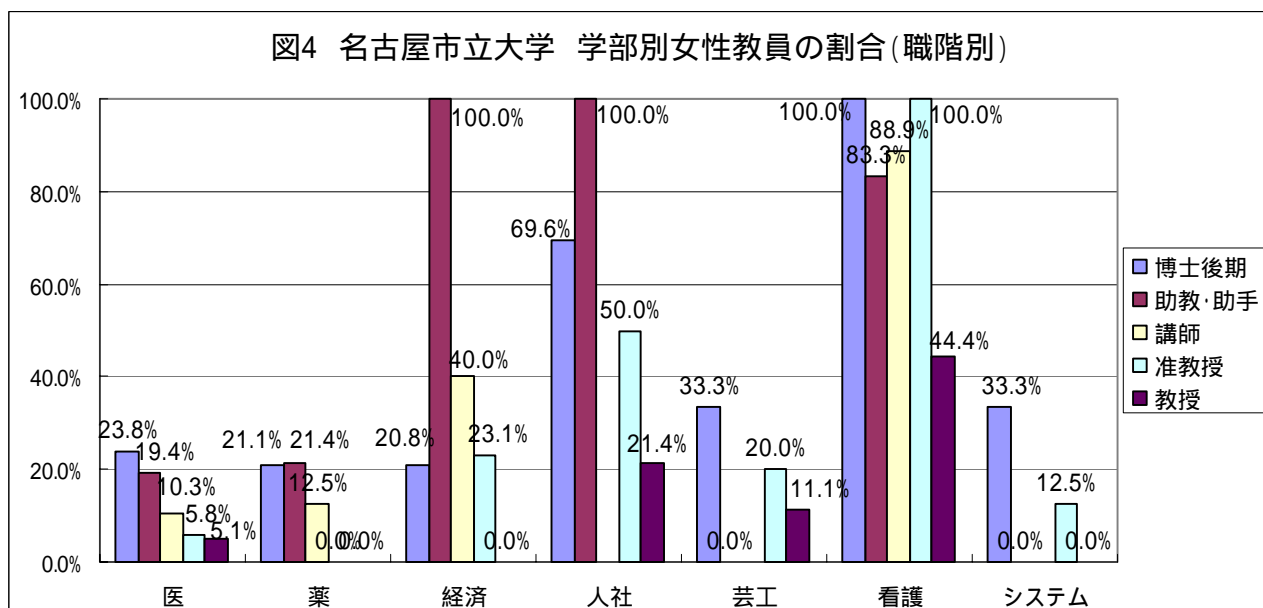
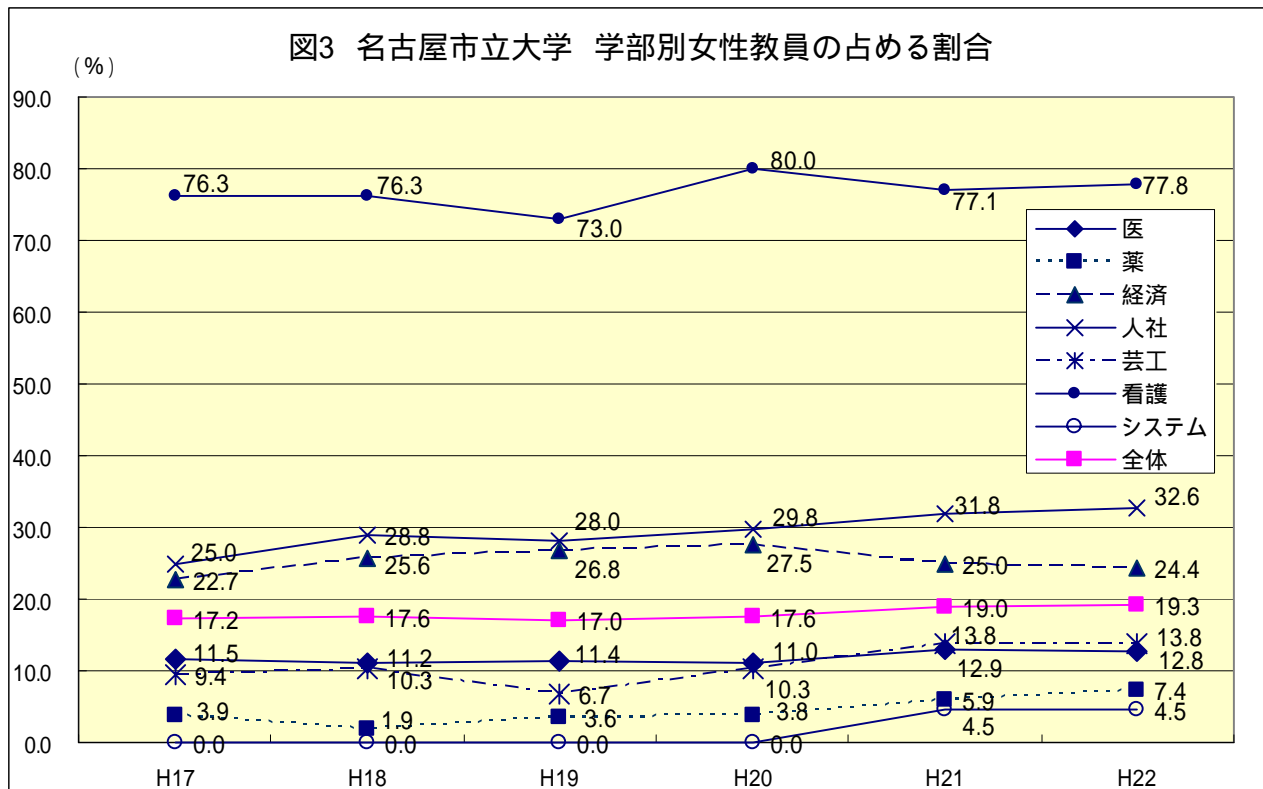
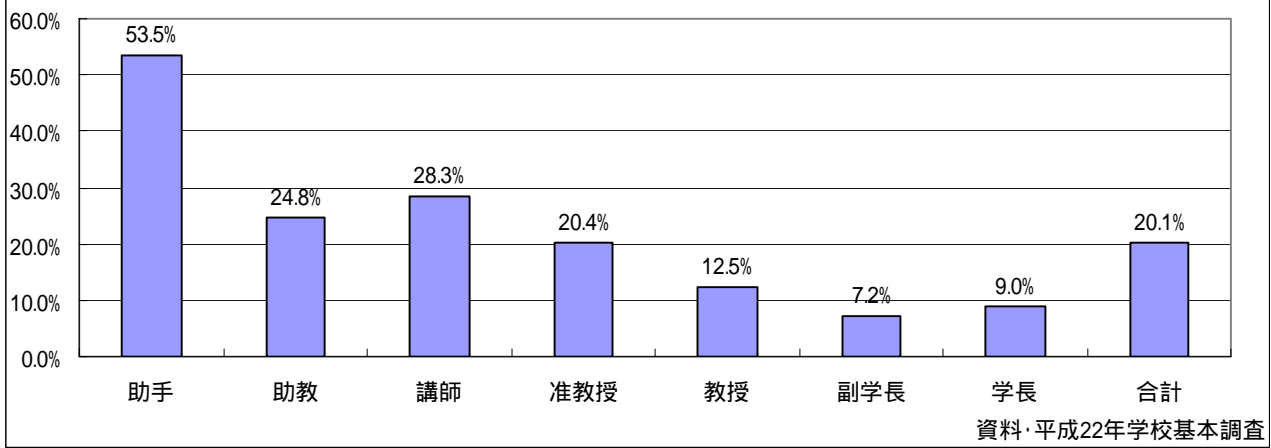


図5 大学教員における職名別女性割合(全国)



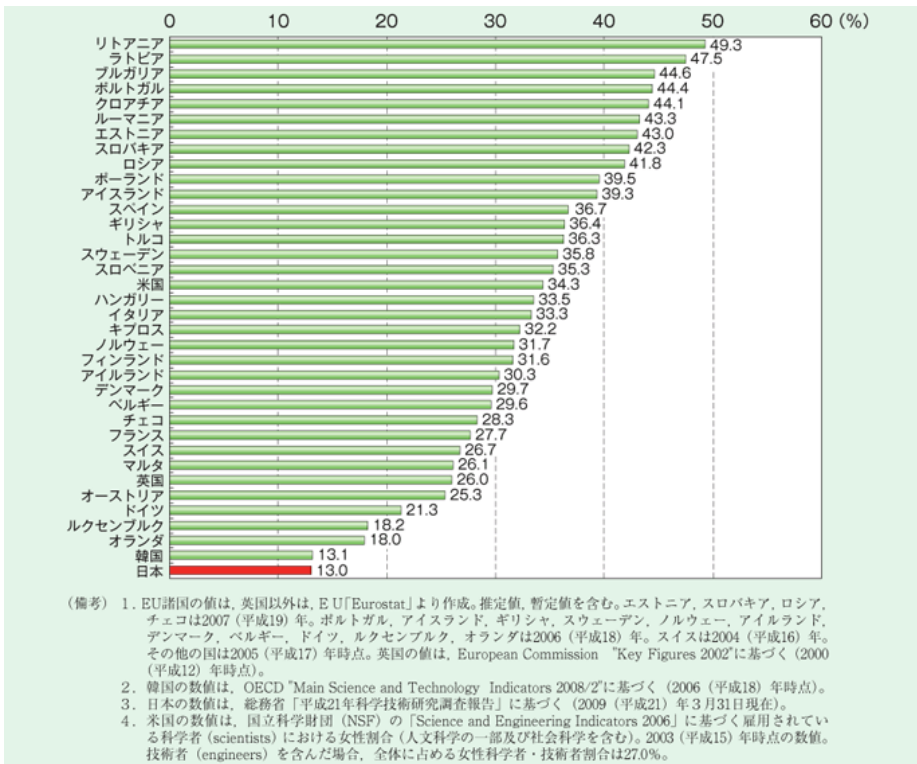
以上で見てきたように、名古屋市立大学では女子学生の割合が比較的高いものの、各学部・研究科によってジェンダーバランスに偏りが見られます。またどの学部・研究科においても、学部や大学院博士前期課程から博士後期課程になるにつれ、また教員の職階が上がるにつれて、女性の割合が低くなっています。

こうした傾向は他大学と同様の傾向を示していますが、諸外国と比較すると日本の女性研究者の割合はとても低いのです(図6)。

では日本で女性研究者が少ない理由はどこにあるのでしょうか。理工系分野など、従来から女性が少ない分野があるという要因もあるでしょう。しかしその他にも、男女共同参画学協会連絡会「科学技術系専門職における男女共同参画実態の大規模調査」(平成20年度)によれば、女性研究者が少ない理由として、家庭と仕事の両立が困難なことや育児期間後の復帰が困難であることなどが上位に挙がっています。

学びたい人が性別にかかわらず学べるように、研究を続けたい人が性別にかかわらず研究を行えるようにすることは、名古屋市立大学男女共同参画室が掲げる目標の一つです。今後、男女共同参画室では、各学部・研究科の現状をふまえながら、すべての学生や教員が活躍できるような環境づくりを行っていきたくと考えています。

図6 研究者に占める女性割合の国際比較



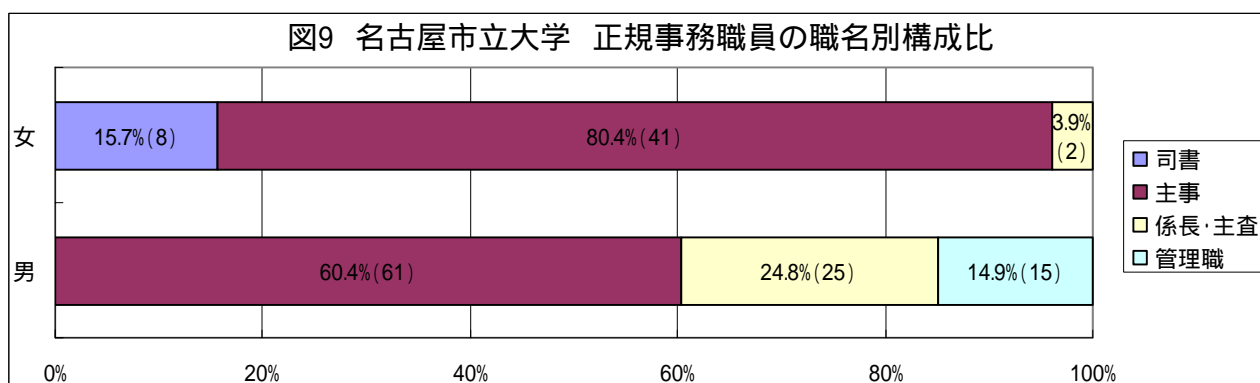
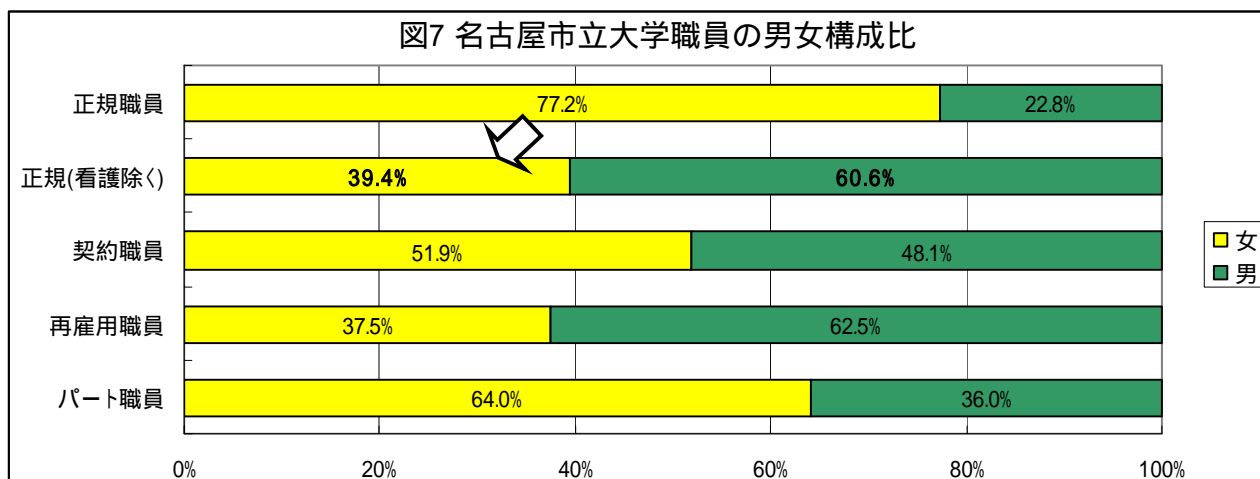
出典：内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書 平成22年版」 <http://www.gender.go.jp/whitepaper/h22/zentai/top.html>

### 3 職員のジェンダーバランス

名古屋市立大学職員の男女比を見ると、正規職員では女性 77.2% (821 人)、男性 22.8% (242 人)、契約職員では女性 51.9% (178 人)、男性 48.1% (165 人)、再雇用職員では女性 37.5% (15 人)、男性 62.5% (25 人)、パートタイム職員では女性 64.0% (249 人)、男性 36.0% (140 人) となっています (図 7)。

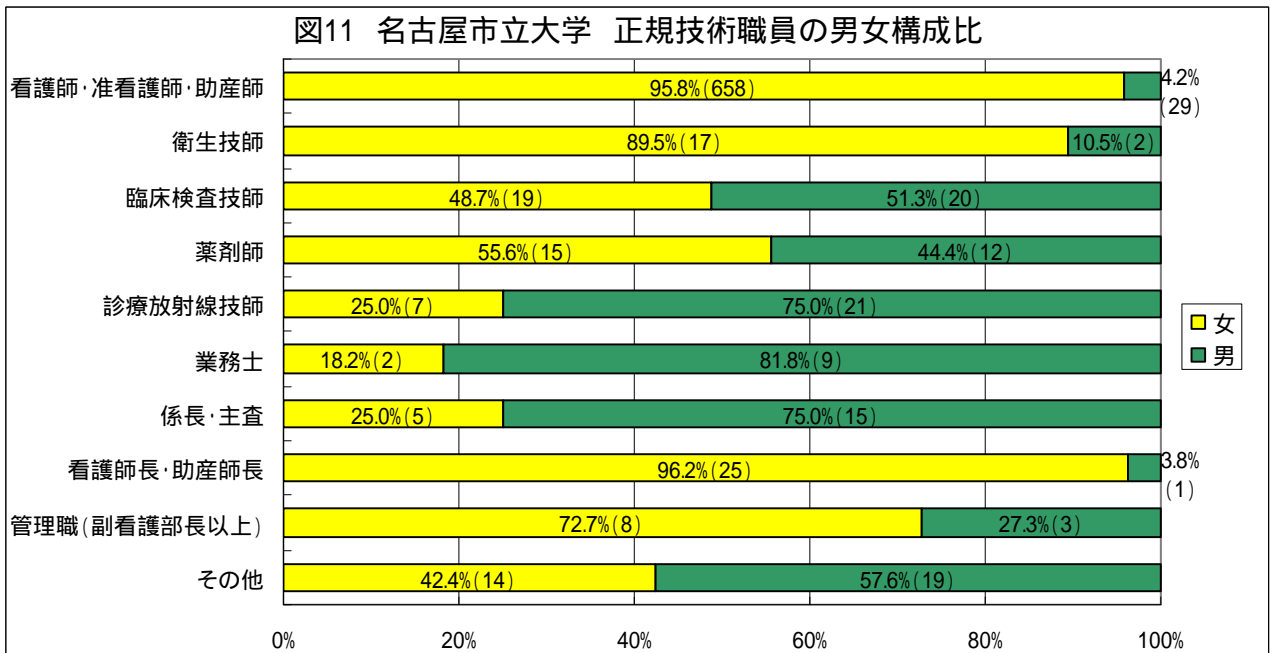
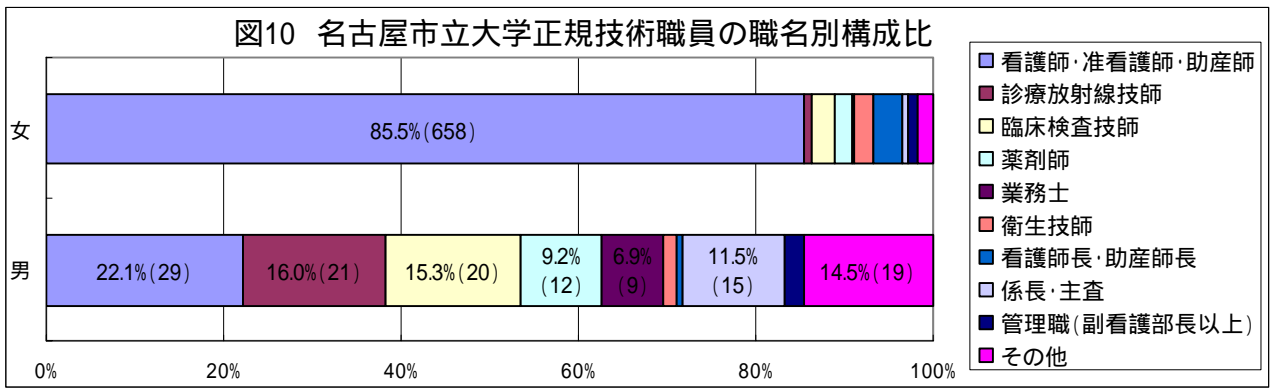
最も女性の比率が高くなっているのは正規職員ですが、その内訳を見ると、女性の正規職員 821 人中 683 人が看護保健職 (看護師、保健師、助産師、看護師長、助産師長) であり、看護保健職を除けば正規職員の女性比率は 39.4% とそれほど高くはありません。

正規職員のうち事務職員を職名別に見ると、女性では 80.4% が主事、15.7% が司書、3.9% が係長となっています<sup>1)</sup>。男性も主事の割合がもっとも多いのですが (60.4%)、主査・係長 (24.8%)、管理職 (14.9%) など、女性に比べより上位の職についている比率が高くなっています (図 9)。また役員には女性は一人もいません。



一方、技術職員を職名別に見ると、女性 770 人のうち 85.5% が看護師・准看護師・助産師として勤務しており、男性に比べて一つの職種に集中していることがわかります (図 10)。また看護師長や看護師、助産師、衛生技師では女性の割合が、係長や業務士では男性の割合が 8 割を超えるなど、職種によって女性比率の高い職種と男性比率の高い職種が明確に分かれていることも特徴です (図 11)。

1) 主事とは一般事務を行うもの、司書とは図書館の専門的な事務を行うものである。職員の段階は上位から、部長 (事務局次長、病院管理部長及び病院看護部長)、課長 (課長、室長、主幹、事務長、技師長、病院副薬剤部長及び病院副看護部長)、係長 (係長、主査、病院助産師長及び看護師長)、係員となっており、主事・司書は係員に含まれる。



契約職員やパートタイム職員でも、女性比率の高い職種と男性比率の高い職種が明確に分かれています。契約職員では、事務系職員や技術系職員の女性比率が高い一方、研究医・研修医や特任教員で男性比率が高くなっています(図12)。パートタイム職員でも、事務系職員や技術系職員では女性比率が、非常勤医師では男性比率が高くなっています(図13)。

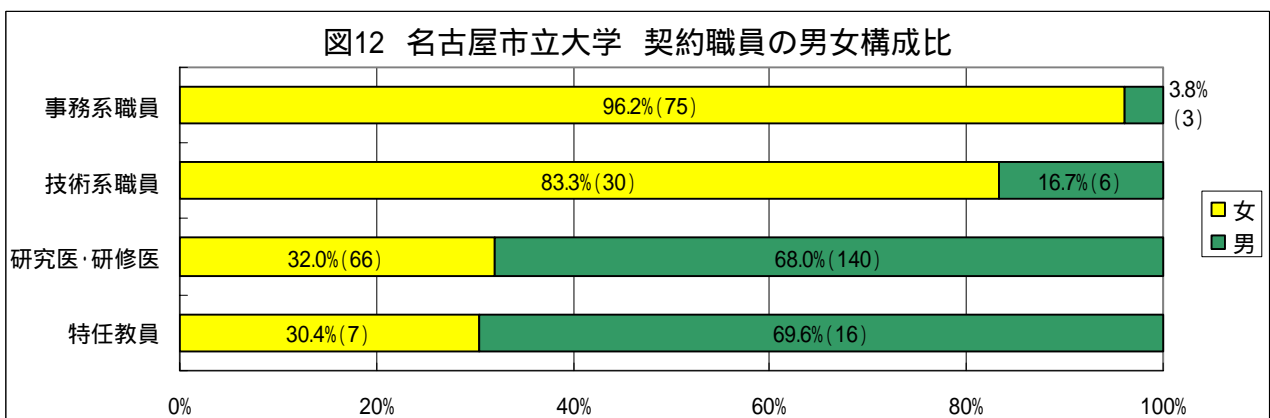
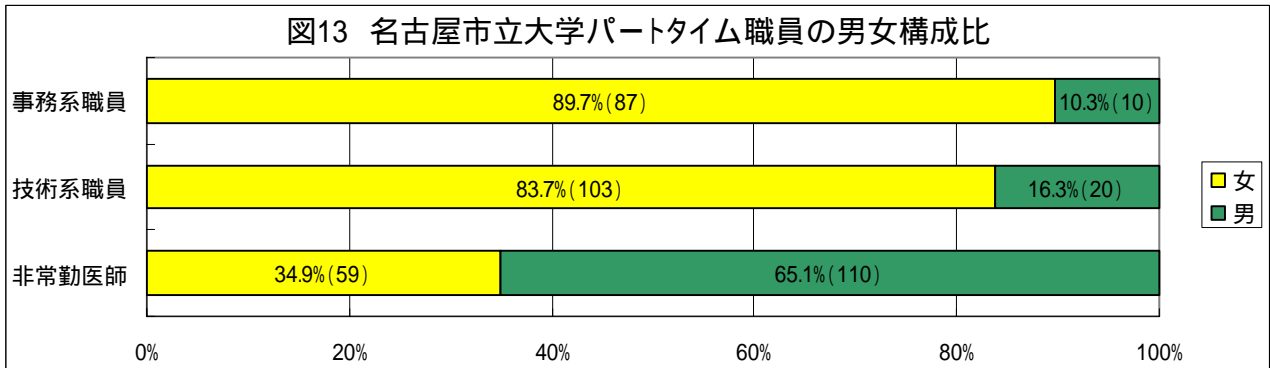


図13 名古屋市立大学パートタイム職員の男女構成比



名古屋市立大学ではたくさんの女性職員、男性職員が働いています。

しかし特に事務系の職種において、正規職員の女性が主事にとどまり、契約職員やパートタイム職員として働く女性が多いなど、女性が下位の職位に偏っている状況が明らかになりました。また技術職においては、職種によってジェンダーバランスの偏りが大きいことがわかりました。

名古屋市立大学を活気あふれる職場にしていくためには、係長や管理職への女性の登用を積極的に行い、方針決定過程への女性の参画の拡大を進めていくことが必要です。同時に、不安定な雇用に女性が多く置かれていることも問題です。非正規雇用の雇用環境整備に向けていっそうの取り組みが望まれます。

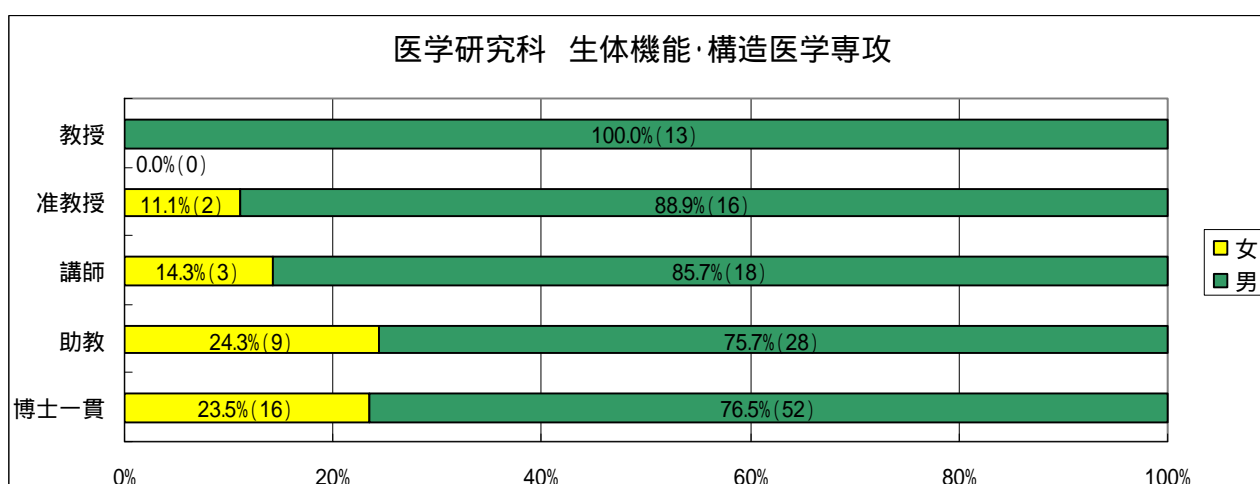
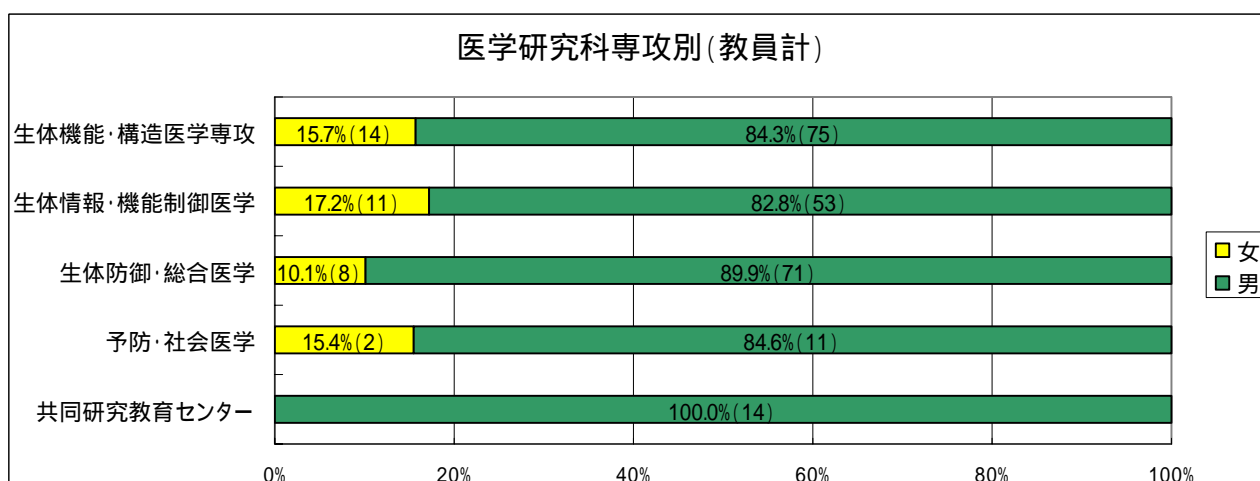
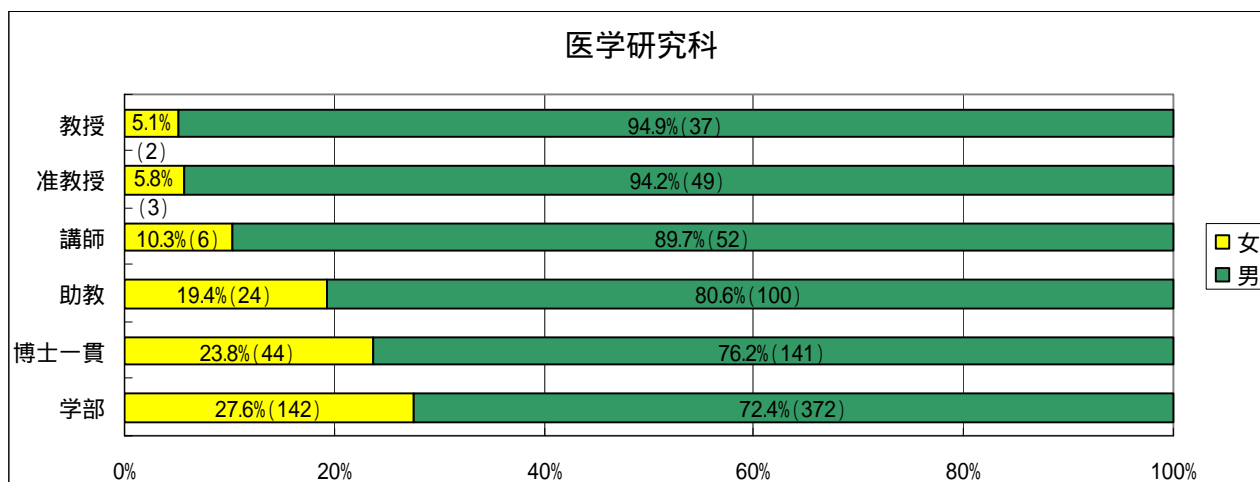
名古屋市立大学が今後も発展していくには、女性を含め、多様な人材が能力を発揮できるような環境整備が必要となります。今後、男女共同参画室ではそれぞれの部局の現状をふまえながら、各市大の全構成員が活躍できる環境づくりを行っていきたいと考えています。

## 各学部・研究科の学科別・分野別データ

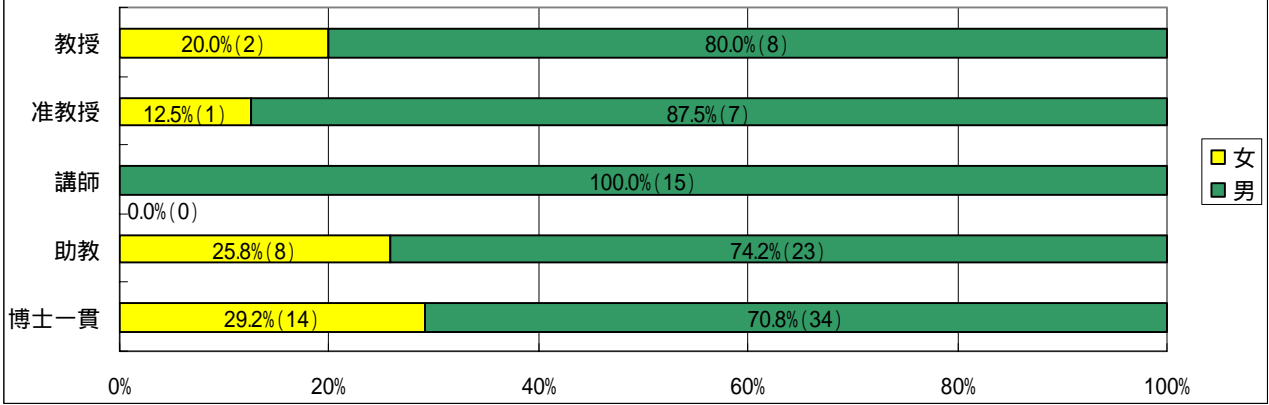
### 医学研究科

医学研究科では学生、教員ともに男性比率が高いものの、学部学生では女性比率が3割弱と比較的高くなっています。博士課程や教員になるにつれて徐々に男性比率が高まっていきます。

専攻別に見ると、どの専攻においても女性教員の割合は10%台ですが、生体防御・総合医学専攻や予防・社会医学専攻では准教授以上の女性がいません。より細かく分野ごとに見れば、女性教員のいない分野も多くあります(図表は割愛しています)。



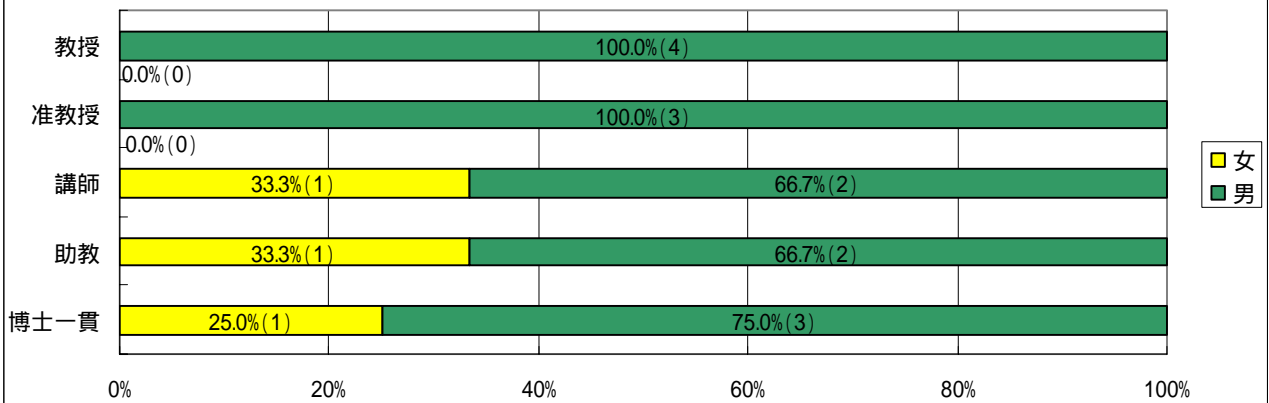
医学研究科 生体情報・機能制御医学専攻



医学研究科 生体防御・総合医学専攻



医学研究科 予防・社会医学専攻

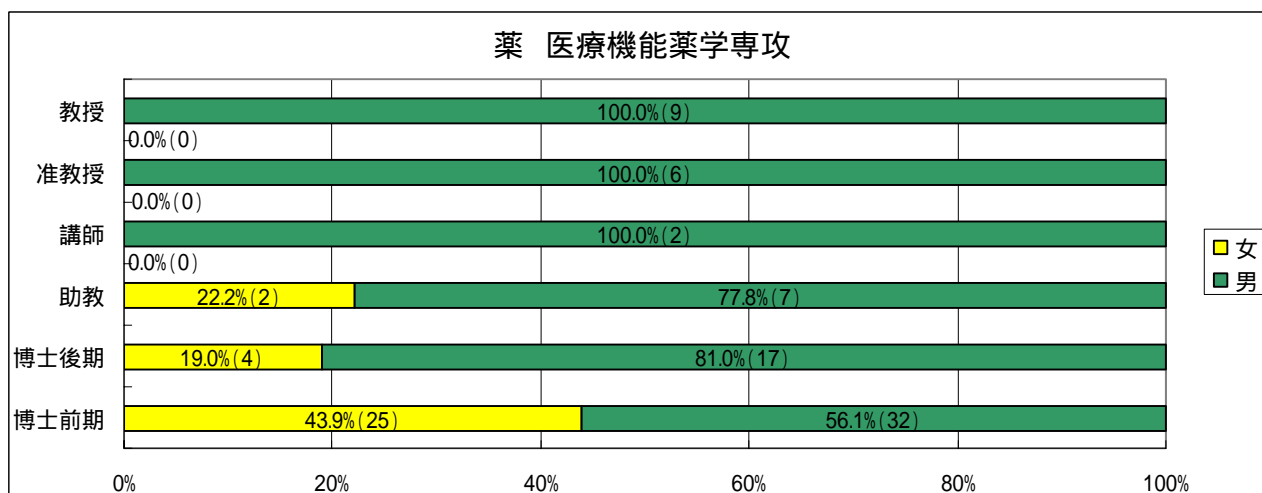
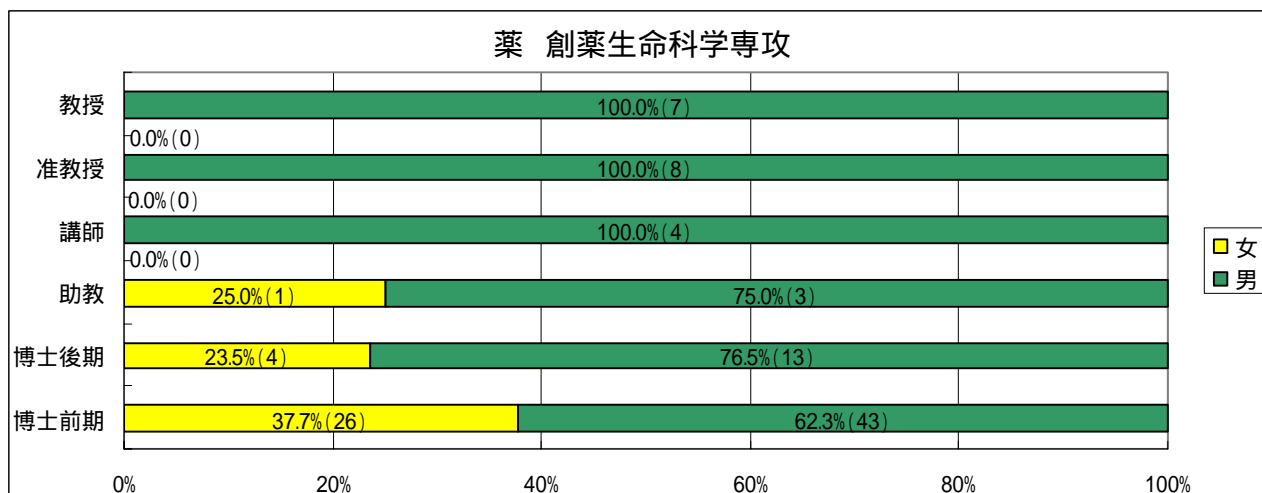
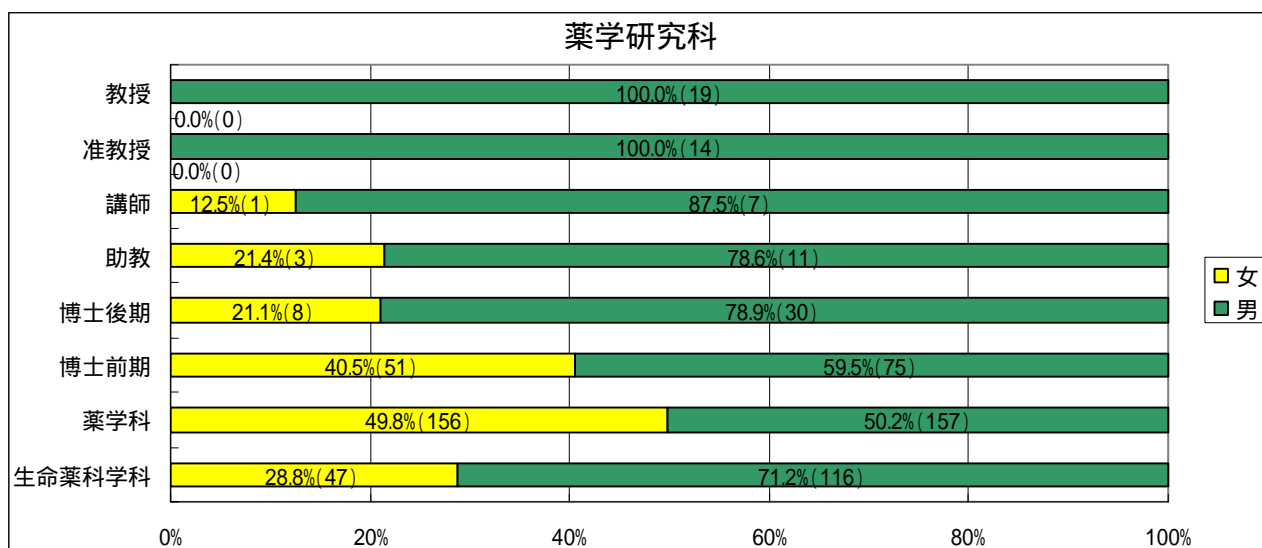




## 薬学研究科

薬学部では学科によって男女比が異なっています。薬学科（6年制）では男女比がほぼ半々ですが、生命薬科学科（4年制）では男性が7割を占めています。

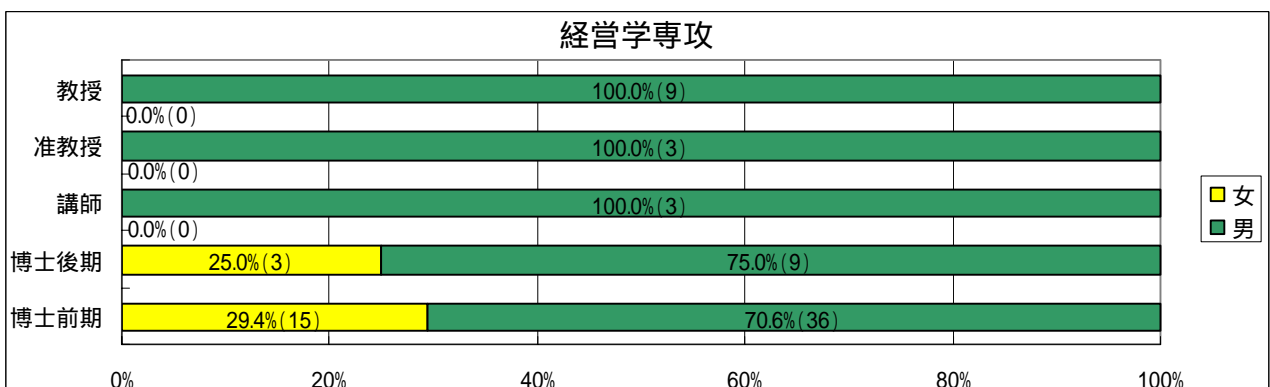
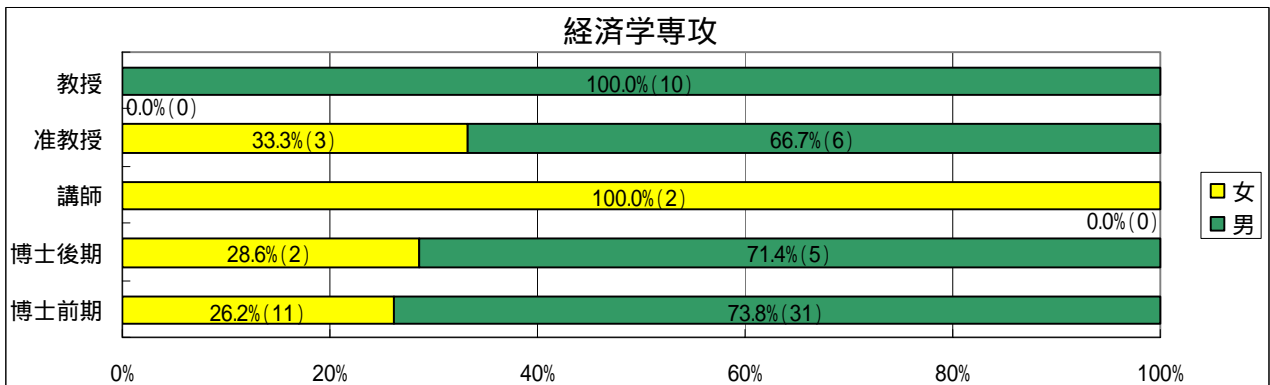
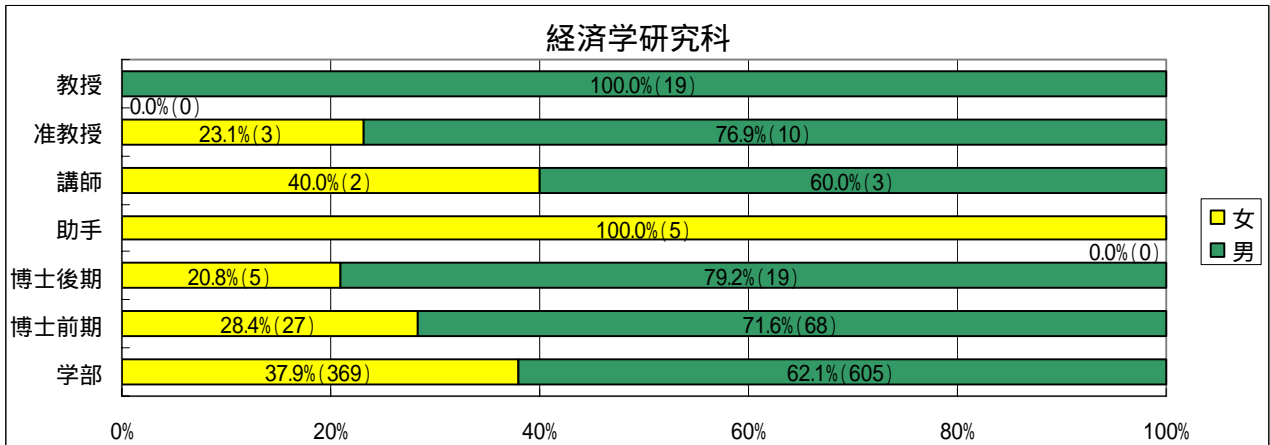
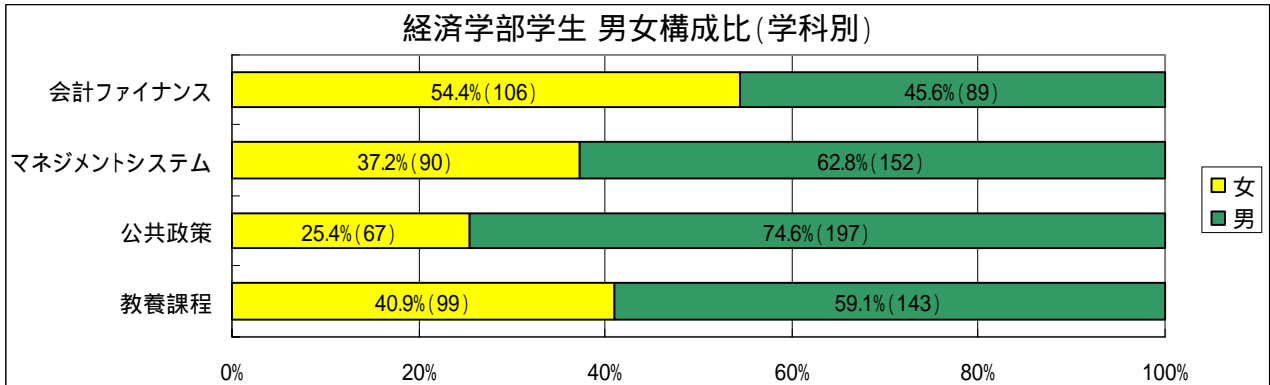
また薬学研究科博士前期課程までは女性の割合が高い（40.5%）のに対し、博士後期課程で女性比率が急激に低下しています。教員の女性比率も低く、女性の教授や准教授はいません。



## 経済学研究科

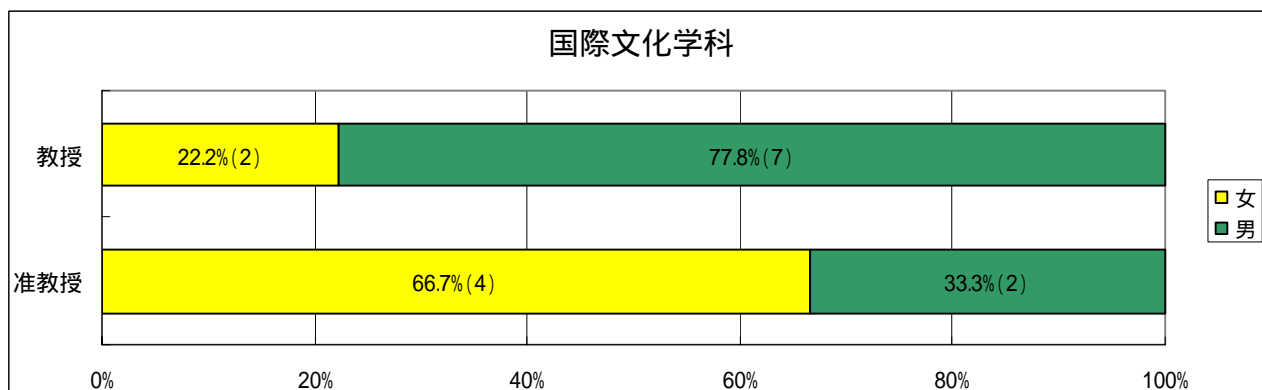
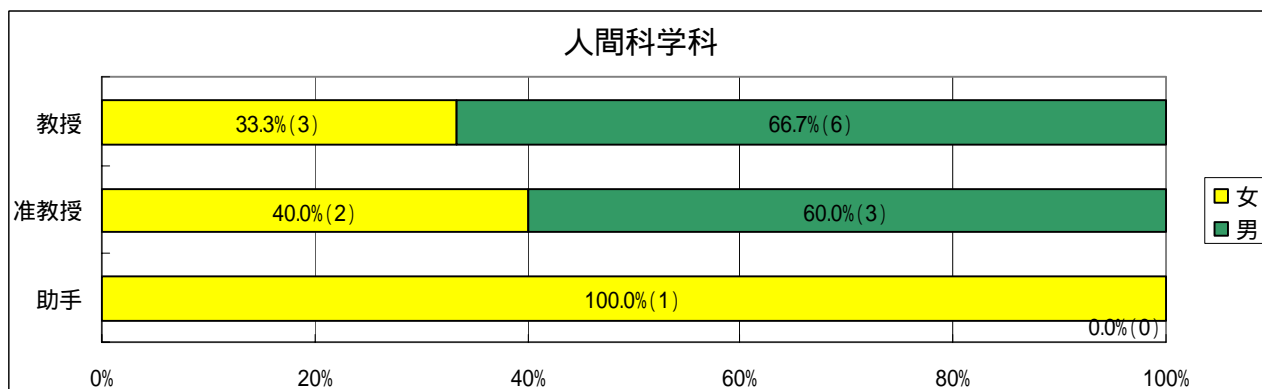
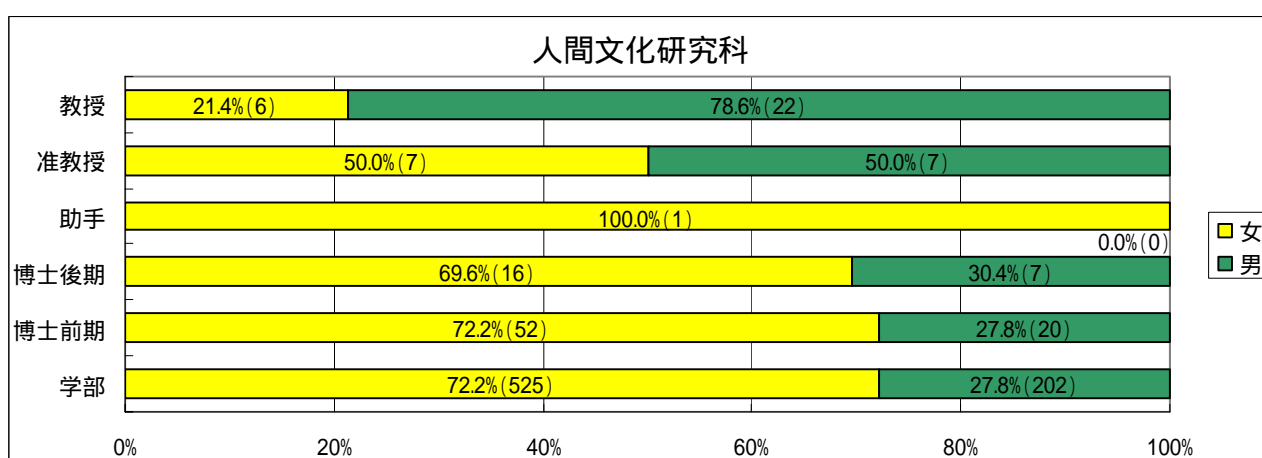
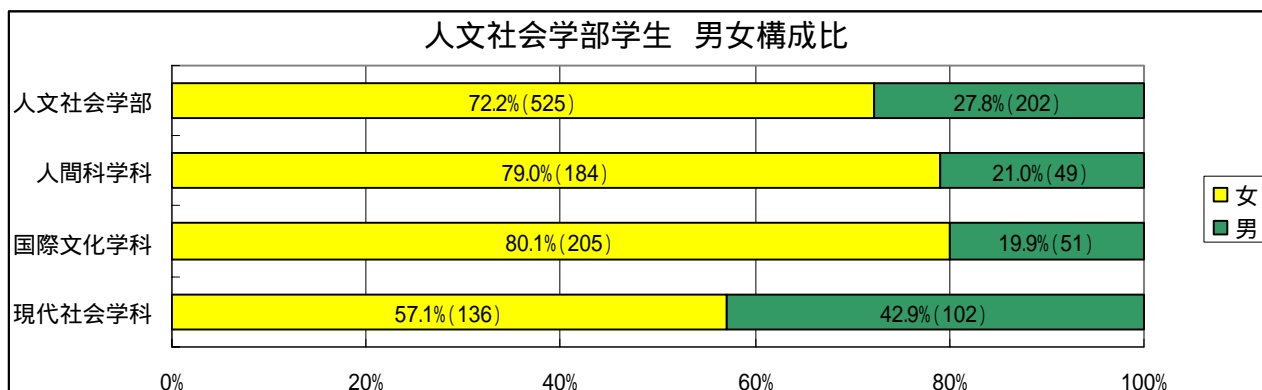
経済学部では学科により男女比が異なっています。会計ファイナンス学科では男女比がほぼ半々であるのに対し、公共政策学科やマネジメントシステム学科では男性の比率が高くなっています。

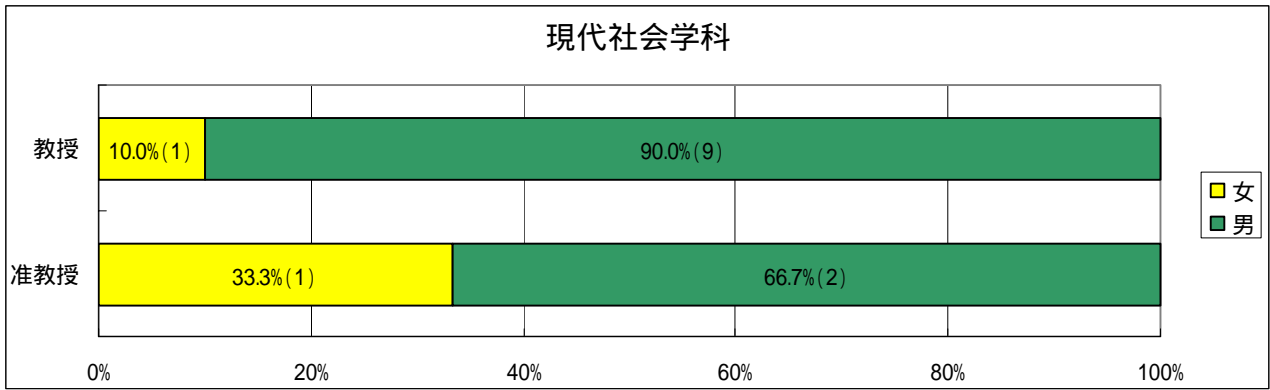
教員の女性比率は24.4%と大学院生の女性比率と同程度ですが、女性教員10人中5人は経済教育研究支援室の助教であり、女性教授はいません。



## 人間文化研究科

人文社会学部では女性比率が高く、特に人間科学科や国際文化学科の学部学生では女性が 8 割を占めています。大学院生や教員の女性比率も高いものの、教授では 28 人中女性は 6 人と一気にその値が下がっています。3 学科の中では学生の男女比率と同様、現代社会学科の女性教員の割合が低くなっています。

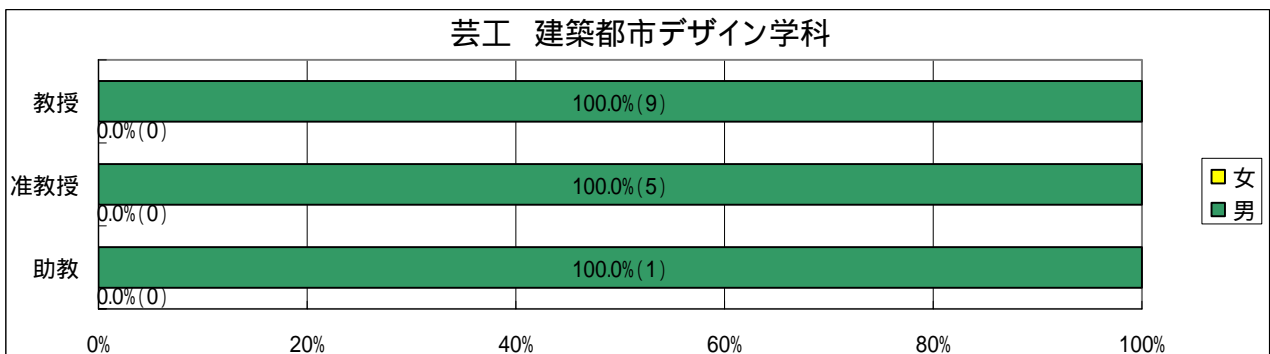
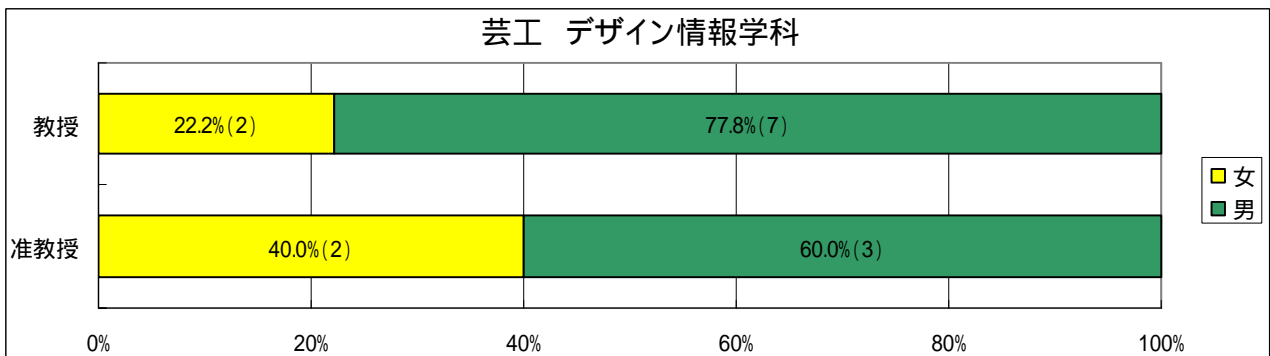
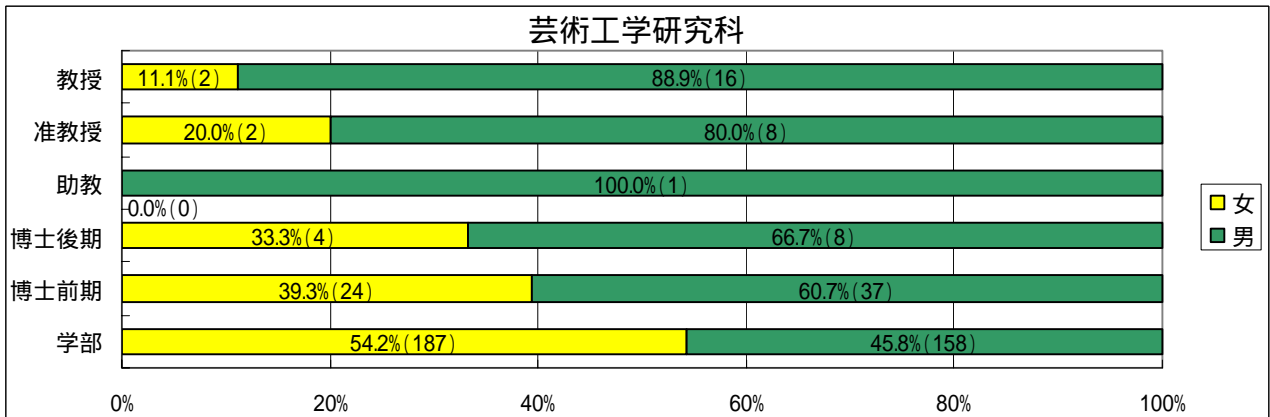




## 芸術工学研究科

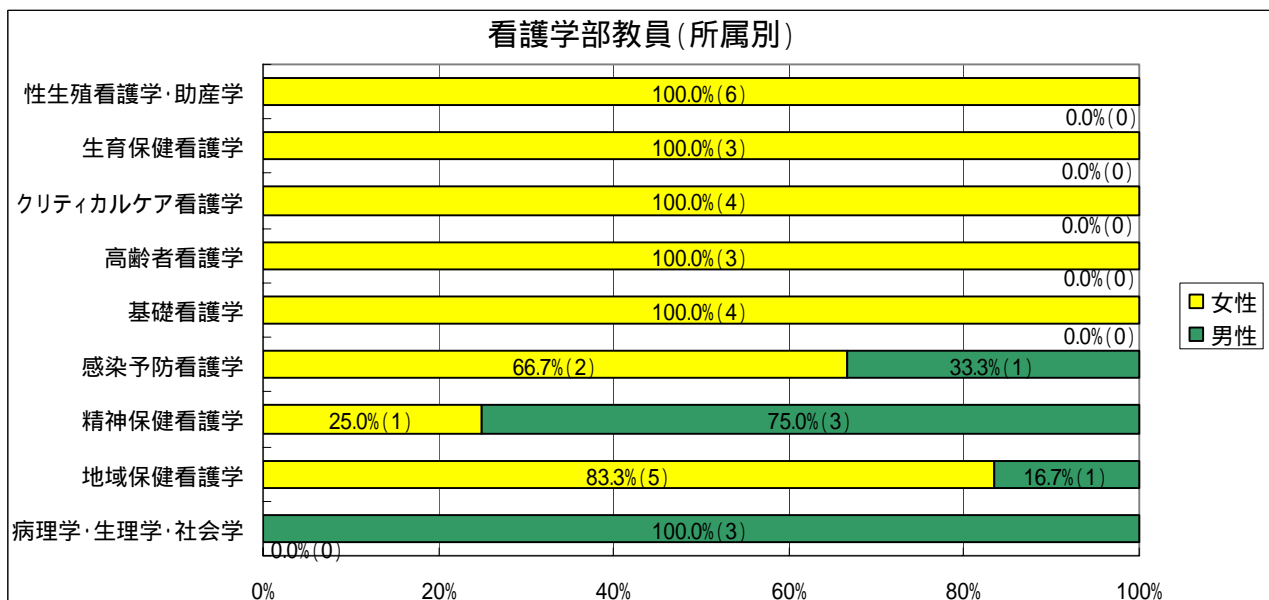
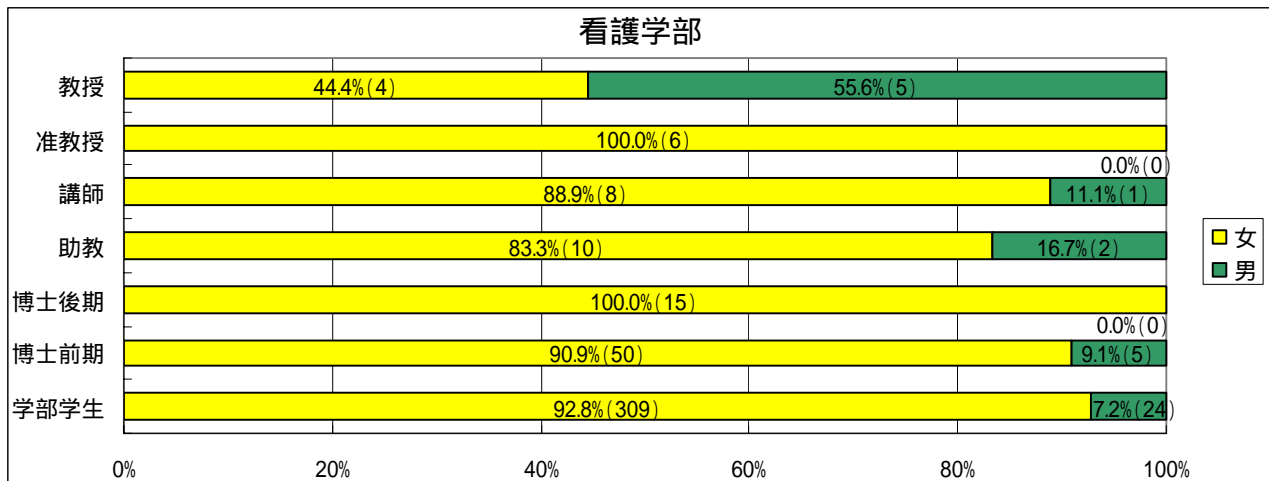
工学系の学部ですが、学部学生（54.2%）や大学院博士前期課程学生（39.3%）、博士後期課程（33.3%）の女性比率は比較的高くなっています。

女性教員の比率は13.8%と高くありませんが、女性教員4名のうち、教授2名、准教授2名と上位の職階についていることが特徴的です。ただし学科別に見ると、女性教員はデザイン情報学科に集中しており、建築都市デザイン学科では女性教員はいません。



## 看護学部

看護学部では学生の9割以上が女性であり、教員も助教や講師、准教授は圧倒的に女性比率が高くなっています。教授のみ男女比が半々となっており、所属の上でも男性の多い所属と女性だけの所属に分かれています。



## システム自然科学研究科

システム自然科学研究科は自然科学系の研究科ですが、博士前期課程では男女比がほぼ半々であり、博士後期課程でも女性が3分の1を占めています。それに対し女性教員は1名とごく少数にとどまっています。

